

---

# リリカルなのは 深緑の男

ジャン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカルなのは 深緑の男

### 【コード】

N19600

### 【作者名】

ジャン

### 【あらすじ】

少女を守る使命を受けた青年は再び戦いに身を投じる。

## 第一話 序章

### 第一話 序章

ミッドチルダの果ての深い森の中、青年が一人キャンプをしている。

「……………」

焚き火が弾ける音がすると何かのメロディが青年の頭の中に流れた。

『……………だ…あ…』

「…………この声はなんだ？」

その言葉に反応する青年。

『…………い…だ…あ…』

青年の頭に響く声は止まない。

『……………ら…い…だ…あ…』

「…………誰だ俺を呼ぶのは？ ……誰なんだ？ ……」

青年の頭に女性と金髪の少女の姿が映る。

「…………ネオ生命体？ ……フェイトを守れ？ ……フェイト…………  
フェイト・テストロツサ！！」

『ライダー!』

その言葉と同時に焚き火が消えた。

青年が立ち上がった瞬間

風が吹き

木の葉が舞い

青年の姿が変わった

バツタを思わせる緑色の身体

腹部の鮮血を思わせる玉

赤い瞳

青年は戦いの場に赴いた。

## 第二話 新緑の戦士立つ

### 第二話 新緑の戦士立つ

青年はバイクを走らせながら考えていた。

（なぜネオ生命体が・・・あの時倒したはず・・・望月博士と一緒に居たあの人が関係が？）

青年はある場所にたどり着いた。かつてミッドチルダにてネオ生命体の研究が行われていた施設の一つだった。

青年は研究室跡に入ると辺りを物色し始め一つのファイルを見つけた。

「・・・これは」

青年が目を通したのはプロジェクトFとネオ生命体の融合という箇所だった。

「・・・まさか・・・この実験が密に行われていたのか」

青年はそのファイルをくまなく見た。

別の場所ではフェイト・テストロッサが裁判所へ向かうべく護送されていた。

「え？」

突然の爆撃に横転する車。

「な・なに・・・」

フェイトが車から這い出るとそこには怪物がたっていた。

「な・なに・・・なんなの・・・」

(フェイト・テストロッサ・・・)

目の前の怪物はフェイトを認識すると歩み寄った。

「く！バルデッシュュー！！」

身の危険を感じたフェイトはバリアジャケットを装着すると目の前の怪物に斬りかかった。しかし怪物はバルデッシュュを掴み取りそのままフェイトを投げ飛ばした。

「ああ！」

壁に叩きつけられるフェイト。

「く!!」

フェイトはそのままバルディッシュで斬りかかるが怪物は赤子の手を捻るようにフェイトを投げ飛ばした。

「は・・・はあ・・・」

力の差がありすぎる。だがフェイトはなのはや友達を思いこの状況を打破するべく斬りかかった。

「うあああああ!!」

「く!!あ・・・あ・・・」

突如青年の頭にフェイトの悲鳴が響き渡った。





「!!!」

壁が突き破られバイクと共に一人の戦士が現れた。戦士はフェイトを掴んでいるモンスターの手を切断した。

『グガアアアアアア』

「あ!」

地面に落下したフェイトが見た者は。

「仮面・・・ライダー・・・」

フェイトが見たのは緑色の身体、鮮血を思わせる玉、そして赤い瞳を持つ戦士だった。

(違う・・・一文字さんじゃない・・・)

フェイトが今見ている仮面ライダーは一文字ではなかった。

怪物の瞳の中にプレシアの姿が映った。

（見なさい！これが私達の創り上げた・・・改造人間第一号よ・・・人間の身体の改造は・・・まだ未熟だけど・・・）

怪物は仮面ライダーを認識すると腕を再生させた。

『ガアア！！』

鋭利になった腕を再生させると仮面ライダーに向かっていった。

「！！」

仮面ライダーはモンスターに飛び掛るとフェイトから距離を離れた。そして追撃をしようと殴りかかるがモンスターの光線で吹き飛ばされてしまった。

「ぐおあ！」

モンスターはフェイトの目の前に仮面ライダーを投げつけた。

「ひっ！」

目の前の仮面ライダーが味方かどうかわからないフェイトはおびえている。

「く！とお！とお！！」

目の前の怪物を殴りつける仮面ライダー。だが目の前の怪物にあま

り効果がない。その隙にフェイトが逃げ出した。

「とお!?!」

仮面ライダーの攻撃が怪物に突き刺さるが怪物は仮面ライダーを締め上げた。

「ぐー!」

そのとき逃げ出したフェイトの姿を見た怪物は仮面ライダーをフェイトの前に投げつけた。

「はっ!?!」

目の前に落ちてきた仮面ライダーに驚くフェイト。

「ぐ・おあ・・・」

怪物の追撃が繰り返されるその時。仮面ライダーがフェイトを抱きしめ跳躍した。光線の連撃を浴びせられるが仮面ライダーがフェイトの盾となっている。

「ここに隠れているんだ」

仮面ライダーは再び怪物と対峙した。攻撃が繰り返られるがモンスターに決定打になっていない。すると千切れた配線を見つけた。

「く!とお!」

仮面ライダーは配線突きつけると怪物が苦しんだ。先ほどから受

けていたフェイトの電撃が今になって効いてきたのか。配線の電流で怪物の細胞バランスが崩れた。

『ぐ……があ……』

倒れる怪物に対し

「今だ!!」

仮面ライダーはバイクにまたがるとそのまま突撃した。

『グアアアアアアアアアア!!!!』

すさまじい圧力に吹き飛ばされる怪物はそのまま動かなくなった。それを見届ける仮面ライダー。

しばらくするとフェイトの元へ管理局員が保護に来た。

「大丈夫だった」

「は・はい」

リンディの言葉にフェイトは辺りを見回す。

「……あの人はどこに？」

フェイトがあたりを見渡しても仮面ライダーの姿は無かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

無事に管理局に保護されるフェイトを青年・麻生勝は影から見守った。

### 第三話 仮面ライダー

#### 第三話 仮面ライダー

「じゃあ本当に見に覚えがないのね？」

「はい……」

リンディの取調べにフェイトは俯いたままだった。

「そして謎の仮面ライダー……13人目？けど敵か味方が分からないわね」

その言葉を管理局施設外から麻生が凄まじい聴覚で聞いていた。接触ができないためつかず離れずの距離を保っている。

「私は……味方だと思いたいです……」

「根拠は？」

「私のことを守ってくれました……」

「にわかに信じられないわね……とりあえず……バルディッシ」  
「を直さない」と

「それが……」

「どうした？」

エイミーが申し訳無さそうに口を開いた。

「バルディッシュを直す事はできないんです・・・破損がひどすぎて・・・」

「そんな!?!」

バルディッシュが直らないそしてその言葉を聞いた麻生も同様に隠せない。

「・・・バルディッシュ」

フェイトは砕け散ったバルディッシュを見つめていた。

「しっかりしてフェイト!」

アルフが元気をつけようとするがフェイトの表情は沈んだままだった。

「なんで・・・私が狙われるの？」

「フェイト・・・」

「怖い・・・バルディッシュも無い・・・怖い」



「しつかりしな！どんな事があってもフェイトはあたしが守るよ！」

「アルフ・・・」

今アルフの言葉がとても頼もしいフェイト。それは麻生もだった。

一方

麻生に倒された怪人ドラスFは不気味に目を覚ました。

（再生機能低下・・・目の前の同型の生物分析・・・測定不能・・・だがまだ力を使いこなせていない分有利）

そう分析が終わるとドラスFは両手から光線を放ちこうもりと蛇を進化させ怪人にした。

こうもり怪人と蛇怪人はそのままフェイト襲撃に向かった。

「さ・元気出して」

「うん」

アルフに連れられながらフェイトは歩き始めるがその前に麻生が現れた。

「・・・フェイトちゃん」

「誰だいなんた!」

「!は!」

思わず逃げ出すフェイト。

「フェイト!」

「フェイトちゃん!」

フェイトを追う麻生だがアルフに阻まれる。

「させないよ!」

「く!ぬん!」

「がは！」

アルフが溝を殴られ気絶してしまった。アルフを介抱する麻生。

「フェイトちゃん待ってくれ！」

麻生が再びフェイトを追いかける姿をクロノが見ていた。

「あれは……」

一通り走るがフェイトは走るのを止めてしまった。

「はあ……はあ……」

「フェイトちゃん」

フェイトは追いついた麻生に恐怖している。今の状態では誰も信じる事ができない。

「いや……来ないで！！私に何のようなの！？何で私を！？」

バルディッシュの無い今の状態では身を守る術がない。

その時だった。

「動くな！」

クロノにS2Uを突きつけられる麻生。

「お前は何者だ・・・何故フェイトに付きまとう?」

クロノは麻生を睨み付ける。

「フェイトちゃんは怪物に狙われている・・・だからガードしていただけた」

「ガード?・・・魔導師じゃないのに?」

クロノは麻生の言葉を疑うが同時にフェイトの言っていた謎の仮面ライダーの事も思い出した。しかし今の状態で麻生の言葉を信じるほどクロノもお人よしではない。

「・・・何者だか知りませんが・・・フェイトを付回すのはやめてください」

「!」

すると突如大型のこうもりが麻生たちに襲い掛かった。

「ステインガレー!」

クロノの攻撃が浴びせられるとこうもりは怪人の姿になった。ダメージが全く無い。

「なんだ!?!」

クロノが驚愕していると麻生が前に立ちはだかった。



「!!!」

麻生が構えるとこうもり怪人に襲い掛かった。そして麻生の姿が変わったことに驚くフェイトとクロノ。

「仮面・・・ライダー」

「とお!とお!」

『ギシャアアアアア!』

麻生の拳が次々と突き刺さると今度は地面から蛇怪人が現れた。蛇の尻尾が麻生の首を締め上げる。

「ぐ!とお!」

麻生は振りほどくと蛇怪人の尻尾を掴み取り振り回した。

「とお!」

『グエエエエエエ!』

「とおおお!」

麻生の攻撃が蛇怪人を貫くと蛇怪人は絶命した。

『ギシャアアアアア!』

こうもり怪人は撤退すると見せかけフェイトを拉致した。

「うわあああああああ!!」

「は!フェイトちゃん!!」

「フェイト!!」

飛び去るころもり怪人を追うクロノと麻生。

「!!」

麻生はZブリンガーを猛スピードで走らせる。

「ステインガーレイ!!」

クロノの攻撃が邪魔をしころもり怪人を足止めすると麻生が飛び掛りフェイトを救出した。地面に降り立つ麻生。

「フェイトちゃんしっかりしろ!!」

「.....」

麻生の腕で気絶しているフェイト。

「フェイト!!は!!」

駆けつけたアルフは変身している麻生の姿に驚いていた。

## 第四話 真実

### 第四話 真実

「つまり・・・あなたもプロジェクトFの関係者という事？」

「はい・・・僕は望月博士の助手としてフェイトちゃんの出生に関わりました・・・」

時空管理局に來た麻生はかつての罪をリンディに打ち明けた。

「そして・・・これが・・・」

リンディは麻生から渡されたファイルを見た。

「これは・・・生物兵器？違う・・・なんなのこれ？」

「ネオ生命体です」

「あの怪物の名前ね？」

「・・・はい」

「ちょっと待ちな！ネオ生命体だかなんだか知らないけどあんた何



者なんだよ!」

アルフの言葉に麻生は答えた。

「さっきの僕の姿を見てお分かりでしょう・・・僕は・・・僕は望月博士とプレシアさんの実験台にされて・・・改造手術をされているんです」

麻生の脳裏にあの悪夢のような出来事が蘇る。

「止めてください博士! バッタの遺伝子で・・・人間を改造するなんて間違ってます!!」

「黙れ! 私はより強く感情などに惑わされない究極の生物を作りただけだ!!」

麻生の身体にメスが入れられた。

「うああああああああああ!!」

「そして僕は何処を彷徨ったのか山の中で倒れ・・・数年前まで眠っていたんです」

麻生の言葉に絶句するリンディとアルフ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

麻生の表情を見て思わず黙ってしまったリンディ。

「まさか・・・いくらなんでも・・・」

「それに何者かが僕にテレパシーで呼びかけてくるんです。ネオ生命体からフェイトちゃんを守れと」

「ちょっと待って！言っている意味が分からない！第一ネオ生命体って一体!？」

アルフの言葉にまずネオ生命体について話すことにした麻生。

「ネオ生命体とは博士とプレシアさんが研究していた完全生物です。感情にとらわれず・・・凶悪で伶俐で物凄いパワーだけがある・・・以前ネオ生命体を倒すことが出来ましたが・・・プレシアさんがもう一体ネオ生命体を作り上げていたようです」

「じゃあ・・・プレシア女史が生きていて・・・ネオ生命体を使ってフェイトを襲っているあなたはそう言いたいのか？」

リンディの言葉に麻生は黙って頷いた。

「そんな馬鹿を言わないで・・・プレシア女史は確かにあの時死んだはず・・・」

「!?!」

リンディが振り向くとそこにはフェイトが立っていた。

「フェイト」

「フェイトちゃん」

いても立つてもいられなくなりフェイトはそのまま飛び出してしまった。

しばらくするとフェイトは町の中に居た。どのくらい走ったか分からない。だが今の状況から逃げ出したかった。

「母さん・・・そんなに私のことが憎いの・・・」

突きつけられた現実に涙するフェイトはバルディッシュを握り締めていた。

「フェイトちゃん！」

追いついた麻生。

「お兄さん・・・」

「・・・それは？」

麻生は砕け散ったバルディッシュを見つめた。

「バルディッシュが・・・もう・・・直らない・・・う・・・う」

フェイトの泣きそうな顔を見た麻生はバルディッシュを受け取り握り締めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

麻生が目を閉じると

風が吹いた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

麻生が手を差し出した。

「え・・・」

フェイトは驚いていた。

「嘘・・・」

麻生の手にはバルディッシュが完全に復元されていた。

「バルディッシュ・・・大丈夫なの？」

『yes』

（あ・・・この気持ちは・・・）

麻生はバルディッシュから何かの気持ちを感じ取った。

フェイトはバルディッシュを受け取り麻生の話を聞いた。

「フェイトちゃん・・・僕が・・・山で目を覚ましたとき・・・望月博士やプレシアさんへの怒り・・・そして君への罪の意識で一杯だった・・・」

「え？」

「けど・・・このバルディッシュから流れてきた気持ちはプレシアさんがどんなに君の事を思っていたか・・・分かる気がするんだ」

「そんなの・・・そんなこと・・・」

「・・・この込められた気持ちは嘘じゃない・・・プレシアさんも悩んでいた・・・」

「嘘・・・嘘」

「僕は・・・博士とプレシアさんが君を生み出すときに立ち会った・・・あの時のプレシアさんの顔は・・・今でも忘れない」

「・・・けど」

「皆一生懸命生きている・・・これを壊しちゃいけない・・・だからプレシアさんはリニスさんに言ってこれを君に託したんだ・・・もう壊さないように」

「母さんが・・・」

フェイトはバルディッシュを見つめた。

「お兄さん・・・」

「・・・戻ろう」

麻生とフェイトが管理局に戻ろうとしたその時だった。

「!?!」

『ギシャアアアアアアアア!?!』

こつもり怪人が襲撃しフェイトを奪取した。

「きゃ!」

「は!フェイトちゃん!」

こつもり怪人はビルの中に逃げ込んだ。麻生もその後追う。

「何故だ?何故飛び去らない?」

麻生はビルの階段を登りながらこつもり怪人が飛行能力を使わないことを不審に思っていた。その時。

「は!」

フェイトを追いかけた麻生の前に倒したはずのドラスFが立ちふさがった。

「!?!」

ドラスFの腕が飛ぶと麻生を直撃し麻生はビルの窓から落ちてしまった。

「うわあああああああ!?!ぐふ!あ!」

地面に叩きつけられる麻生は気を失ってしまった。

「ぐ・あ・・・」

麻生が目を覚ますと痛む身体を必死に起こした。そのとき一匹の猫が麻生の下に来た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

猫から麻生にフェイトの誘拐された場所が送り込まれた。

「わかった！・・・ありがとう・・・リニスさん」

するとリニスは霧となり消えてしまった。

「必ず・・・フェイトちゃんは助けます！」

麻生はバイクに跨るとフェイトの元へ急いだ。

（待っている・・・フェイトちゃん！）





## 第五話 決着

### 第五話 決着

麻生はフェイトのさらわれた場所に向かっている。

「!!!」

麻生の身体から緑色の炎が噴出しバイク共々飲み込まれると麻生とバイクの姿が変わった。

「!!!」

麻生はZプリンガーを走らせ荒れ果てた研究所にたどり着いた。

麻生は地下室への入り口を見つけると扉を蹴破った。

「とお!!!」

麻生は研究施設を見渡すとフェイトの姿を見つけた。

「ライダー!」

「フェイトちゃん!」

フェイトが麻生に抱きついたと同時にこもり怪人になった。

『クシャアアアアアアアアアアアア!』

「ぐ……とお!!」

『ギシャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

麻生の拳がこうもり怪人を貫くところもり怪人は絶命した。

「く……」

こうもり怪人の遺体を投げ飛ばすと麻生は本物のフェイトを見つけた。

「フェイトちゃん!!」

「ん?…お兄さん?」

「ここから出よう」

麻生とフェイトが施設を脱出しようとしたその時だった。

「ライダー……」

「!!」

麻生とフェイトが振り向くとそこには機械に埋め込まれたプレシアの姿があった。

「ライダー……ライダー……」

「!!プレシアさん!!」

「・・・か・あ・・・さん・・・」

プレシアは目覚めるとフェイトの姿を見て驚いた。

「フェイト・・・なんでこんな所に」

「テレパシーを送っていたのはプレシアさん・・・あなただったのか・・・」

「許してとは言わない・・・フェイトのためにあなたを」

「プレシアさん！ネオ生命体を使ってあなたはなにを企んでいるんだ！！」

「違うわ・・・コバルトドラゴンの力で進化したネオ生命体が・・・あの時私を助けてこんな姿に・・・早く逃げなさい！」

「はははははもう無駄だよ」

麻生たちは声のしたほうに振り返ると絶句した。

「お母さんフェイトちゃんを連れてきたよ 早く私の身体にしてよ」

それはおぞましくフェイトと同じ姿・・・同じ声の少女だった。

「あれは・・・私？」

フェイトは自分と同じ姿をした異型の生物に恐怖している。

「貴様がプレシアさんをこんな姿に」

「お母さんは私をみて怖がっちゃって・・・コバルトドラゴンさんが私をこの姿に進化させてくれたんだよ」

無邪気な声だが同時に恐ろしかった。

「私！アリシアちゃんやフェイトちゃんみたいな出来そこないじゃないよ」

「!?!」

その言葉に奥歯をかみ締めるフェイトはバリアジャケットに身を包み麻生の手で復元されたバルディッシュを構えた。

「あれ〜フェイトちゃんやる気なんだ〜」

「許さない・・・母さんを元に戻して!?!」

フェイトが斬りかかるがネオ生命体の衝撃波によって吹き飛ばされてしまう。

「うわああああ!?!」

「く!?!」

麻生が咄嗟にフェイトを抱きとめるとネオ生命体に構えた。

「あれ？お兄ちゃんやる気なの？無理無理お兄ちゃんが何度戦っても私には勝てないよ」

ネオ生命体が姿を変えるとドラスFの姿になった。

「お前は……」

両者に沈黙が流れる。

「とお！」

麻生が殴りかかるとドラスFは受け止め麻生を殴り飛ばした。麻生は再び殴りかかるとドラスFの拳から電流が流れる。

「ぐ……あ……」

麻生は体勢を立て直すと跳躍し強襲するがドラスFはそのパワーで麻生を叩き落した。

「とぉー！」

麻生が再び跳躍するとドラスFの光線が発射され麻生が叩きつけられた。

「ぐおおお！……あ……あ……」

ショックで変身が解けてしまう麻生。

「お兄さん！」

ドラスFから放たれた触手が麻生の首を絡めとった。

「ぐお！あ・・・あ！」

ドラスFはそのまま麻生を吸収しようとしている。かつてドラスがそうしたように。

「フェイト！バルディッシュを！」

「え？」

「彼力を吸収したバルディッシュなら・・・もしかしたら！！ああ！！！」

プレシアはドラスFに撃墜されてしまった。

「母さん！！く！！」

プレシアの言葉にフェイトはバルディッシュを構えた。

(・・・バルディッシュ・・・お願い・・・力を貸して！！・・・母さん・・・アルフ・・・クロノ・・・なのは！！！)

フェイトの思いに応えたその時バルディッシュに込められた大自然のエネルギーが解き放たれた。

「これは・・・」

バルディッシュは巨大な剣のような姿になった。

「これなら！！はああああああああ！！！！」





麻生の猛攻。ドラスFもこの猛攻に思わずひるむが麻生の拳を掴み取った。

「なに！」

「今度こそお兄ちゃんの身体をもらっね」

吸収されそうになる麻生その時。

「お兄さん！！！」

フェイトが咄嗟にバルディッシュを麻生に投げ渡した。

「！！！」

麻生がバルディッシュを掴んだ瞬間バルディッシュに大自然のエネルギーが流れ込んだ。

「！！！」

「！！！」

麻生の手の中のバルディッシュが進化し巨大な太刀になった。麻生が振り下ろそうとするがドラスFは離さないその時だった。

『グアアアアアアアアアアアア！！』

「！！！！！！」

「はぁ・・・はぁ・・・」

プレシアが最後の力を振り絞りドラスFに攻撃を仕掛けた。  
「グアアアアアアア！」

ドラスFに一瞬の隙ができたその時麻生がバルディッシュを振り下ろした。

「グアアアアアアアアアアアア！」

ドラスFがもがいていると麻生は脱出した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

麻生は構えた。その身体に大自然の力が満ち溢れる。

「はぁ!！」

麻生のキック・・・ZOKキックがドラスFを襲った。

「とお!！」

ZOKキックに吹き飛ばされるドラスFは身体から蒸気が噴出し始めた。

『グアアアアアアアアア・・・お母さん・・・おかあ・・・』

そのままドラスFは動かなくなってしまった。

麻生とフェイトは倒れているプレシアに駆け寄った。

「母さん……」

涙をこらえるフェイトにプレシアは両手を広げた。

「かあ……さん？」

「フェイト……抱かせて……」

「母さん!?!」

フェイトはプレシアに抱きついた。プレシアも残された力でフェイトを抱き返した。

「麻生さん……私をドラスの所へ……」

「え？」

麻生はプレシアを抱き上げるとドラスFの元に下ろした。

「プレシアさん……」

「母さん……」

『ギアア……おか……あ……さん』

まだ絶命してなかったドラスF。プレシアはドラスFを抱きしめた。

「寂しかったでしょ……ごめんね……こんなお母さんで……」

『お母……さん……』

ドラスFは子どもの姿に戻った。

「あなたの名前決めてなかったわね……あなたは……フェリア……」

「フェリア……お母さん……寂しかった！寂しかった！！」

ドラスF……いやフェリアはプレシアに抱きついた。そしてフェイトが。

「私が……お姉ちゃんだよ……フェリア」

「お姉ちゃん……ごめんなさい……お姉ちゃん」

フェリアは力無くフェイトに泣きついた。抱きしめるフェイト。

「ごめんなさい……お姉ちゃん……」

その言葉を残しフェリアは光となり消えた。

「フェリア！！」

「麻生さん……」

「はい……」

「娘を私の子をお願いします……」

「・・・プレシアさん」

その言葉を遺しプレシアは目を閉じた。

「母さん！母さん！！」

「・・・フェイトちゃん」

「お兄さん・・・うあああああああああああ！！！」

麻生の胸で泣き叫ぶフェイト。麻生もフェイトを抱きしめた。

そして麻生とフェイトはプレシアの遺体を弔った。

エピソード

夕暮れの中、麻生とフェイトは街道を走っていた。

フェイトは何も話そうとしない。

麻生も同じだった。

そして目的地に到着すると麻生はフェイトを優しく降ろした。

「お兄さん・・・行っちゃうんですか？」

「フェイトちゃん・・・元気出せ・・・君にはアルフさんや素敵な友達が居るじゃないか・・・」

麻生は優しい笑みを向けながらフェイトに言った。

「フェイト」

連絡を受けていたアルフがフェイトの元に駆けつけたと同時に風が吹き肌寒くなった。麻生はフェイトに自分の着ていた革のジャケット

トを着せた。

「・・・元気だな・・・」

それだけ言うと麻生はバイクに跨り去ろうとしたその時。

「お兄さん！」

フェイトの言葉に停まる麻生。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ライダー！！」

その言葉に麻生は振り返りフェイトに笑みを残した。

それがフェイトが見た麻生の最後の姿だった。

「これが・・・フェイトママの大好きな仮面ライダーのお話・・・」

「へえ」

「フェイトちゃんにもそんな人が・・・」

フェイトがヴィヴィオに話していると、なのはも驚いていた。

「フェイトママ・・・その人のこと好き？」

「好きだな・・・ママにはあの時間は短かいみたいで永かったよ」

フェイトはヴィヴィオに笑顔で答えた。

「じゃあ・・・バルディッシュには麻生さんの大自然の力があるんだ」

「うん」

フェイトはバルディッシュと麻生のジャケットを見ていた。

「フェイトママもね・・・いつかどこかで逢えるって信じてるんだ」

風のように現れ風のように消えてったライダー達。

「あ！はやてさんも仮面ライダー知ってるかな！？」

と言ってヴィヴィオははやての元に走った。

「はやての仮面ライダーって」

「あの人かな」



「はやてさん！」

「ん？ヴィヴィオどうしたん？」

はやてに抱きつくヴィヴィオ。

「はやてさん！仮面ライダー知ってる？」

「仮面ライダー？どうして？」

「なのはママとフェイトママが仮面ライダーのお話してくれたの！」

笑顔のヴィヴィオにはやては

「そっか〜じゃあ話しちやおつかな〜はやてさんの大好きな仮面ライダー」

「わーい！〜！」

第五話 決着（後書き）

少女に出会った青年

そして青年は再び戦つ決意をする

次回！りりかるなのは 金色の男

目覚めよ！その魂！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1960o/>

---

リリカルなのは 深緑の男

2010年11月18日22時17分発行